A long time ago, there lived three brothers; Taro, Jiro and Saburo.

One day, the oldest brother Taro went shopping to the neighboring town.

It was when Taro had finished shopping and came to the street in the mountain on his way home.

“Hm? What is this, I can feel something around here…”

It was very dark already.

There was a rumor that a terrifying monster appeared in the streets where he was walking along.

Suddenly, Taro heard a spooky voice from behind,

“I want to get on your back… I want to get on your back…”

Taro slowly turned around and screamed in fear.

There was a sphere, that was about the same size as a human, glowing and floating right behind him.

“I want to get on your back… I want to get on your back…”

“Eeeek! It’s a monster!”

Taro desperately ran away and went home.

むかし　むかし、あるところに、
たろう、じろう、さぶろう　という、
さんにんの　きょうだいが　くらしていました。

あるひ、ちょうなんの　たろうが、
となりむらに　かいものに　でかけました。

かいものをおえた　たろうが、
かえりの　やまみちに　さしかかったときです。

「ん、なんだ・・なんだか、
きみょうな　けはいを　かんじるな・・」

あたりは、もう　すっかり　くらくなっていました。

じつは　このやまみちには、
おそろしい　ばけものが　でるという
うわさばなしが　あったのです。

とつぜん、たろうの　すぐ　うしろから、
ぶきみな　こえが　きこえてきました。

『おぶさりてえ・・おぶさりてえ・・』

ゆっくりと　ふりかえった　たろうは、
おどろいて　ひめいをあげて　しまいました。

なんと　そこには、ひとと　おなじほどの　おおきさの、
ぼんやりと　ひかる　なぞの　たまが、
ふわふわと　うかんでいたのです。

『おぶさりてえ…おぶさりてえ・・』
「ぎゃー！で、でたーー！！」

たろうは　ひっしに　はしって、
じぶんの　いえまで　にげかえりました。